
君をみつけたStory

音羽 鏑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君をみつけたStory

【Nコード】

N8217P

【作者名】

音羽 鏘

【あらすじ】

大貴族アデライン家の令嬢、メーベルはイケメン好き。だけど社交辞令は大の苦手。そんなメーベルを見かねて両親が結婚相手を探してきたが、その人はまさかの……

各話をまとめてみました。

話自体は変わっていません。

引き続き読んで頂ければ幸いです。

「け、結婚ですって!？」

ある秋の日の朝、大貴族アデライン家の食堂に衝撃が走った。

その衝撃を起こさせた張本人、私の父のアデライン家当主、エイブラハム・レ・アデラインは重々しく頷いた。

「お前ももう18だ。そろそろ結婚してもいい年だと思うのだがな」

「ま……まあそれはそうだけど」

「なんだその態度は」

父は私をじろりとねめつけた。

「そもそもメーベル、お前がきちんと王宮の舞踏会に行っていればこんなことはうるさく言うつもりはないのだぞ」

「だって……面倒くさいんだもの」

私は下を向いた。

私だってかわいいドレスを着るのは楽しいし、他の貴族の女の子と話すのは好きだ。でも、

「みんな心の中で何思ってるか分かんないのよ」

「お前が開けっ広げすぎるだけだろう」

父に即答された。

「お、お母様!」

何も言わずに事の次第を聞いていた母に助けを求めると、

「メーベル、実は私がお父様にあなたにそう言うように頼んだの」

「ええっ!？」

「ええっじゃないわよ。あなたは何でもできるいい子よ。だけど、ちよっと正直過ぎるのが考えものね」

助けなし。周りの使用人達は楽しそうににこにここと食卓を見ている。

「それでね、メール。あなたの結婚相手、お母さんとお父さんが見つけておいたから」

「へっ!？」

「名はね……」

「ちょっと待ってよ!何で私に見つけさせてくれないのよ!？」

あわてて私は割り込んだ。変な人と結婚させられるのは嫌だし。

「そんなこと言って、自分で見つけないんだから仕方ないでしょ。とりあえず見つけておいた人と仲良くなりなさい。嫌ならやめたっ
ていいんだから」

「お前も社交が巧くならないと後々困ることになるからな」

「はい……分かったわよ。やればいいんでしょ、やれば」

渋々私は承諾した。

「じゃ、ごちそうさまでした……って、その人の名前は何というの?」

ああ、と母は手を打った。

「名は、グレイ・レ・ディズレイリよ」

「グレイ・レ・ディズレイリ……ね。分かったわ。じゃ、今度こそ
ごちそうさまでした」

私は食堂から出た。自室へ戻る道すがら、脳内でグレイ・レ・ディ
ズレイリという名前を探す。

……あった。

「ちょっと……まさか、グレイ・レ・ディズレイリって……」

ちょうど自室に着いたので、私はドアを開けて中に倒れこんだ。

「あの醜男が……私の、婚約者……?」

グレイ・レ・ディズレイリ。

ディズレイリ家はアライン家と並ぶほどの大貴族である。古くか
ら代々王直属の騎士を輩出している名家で、王からの信頼もあつい。

グレイはそのディズレイリ家の長男で、王直属の近衛騎士である。背も高く、均整の取れた体つきをしており、性格も悪くない。王直属の近衛騎士ということで、実力もそれなりにある。

ならば女が黙っていないだろうというわけだが、この男には1つだけ欠陥があった。

グレイ・レ・ディズレイリはどうしようもない程の醜男だったのだ。

政略結婚させようとした貴族達は娘達から強い反発を浴びて諦めざるをえなかった。

よりもよって、あの男が私の仮とはいえ、結婚相手だなんて……にこにこと笑う母の顔が頭をよぎる。

どうせあの食えない母のことだから、私がイケメン好きと知ってわざと醜男を選んだに違いない。

とりあえず、私は明日の舞踏会には行かなくてはならないようだった。

翌日、私は紫のドレスを着て、馬車に乗って舞踏会が行われるお屋敷に向かった。

憂鬱な気分で馬車を降りる。

お屋敷に入ると、楽団が奏でる音楽がとてもきれいだったので、私は少しだけ明るい気分になった。

主催者の挨拶もすみ、友人と言えるかどうか分からないが友人に挨拶をした。

「メーベル、その紫のドレス、あなたの栗色の髪によく合っていて素敵よ」

「（こんなの着心地最悪よ）あ、ありがとうアイリーン。あなたの

その緋色のドレス、すごくかわいいわ」

……うう、お世辞って難しい。

すらりとしたアイリーンはすっきりとしたドレスを着ればいいのに何でわざわざフリルのついたドレスを着ているんだろう。かわいこぶっているのだろうか。

これ以上話しているとぼろが出そうだったので私はあわててその場を離れた。

メイドから手渡されたジュースを片手にもちながら急いで離れたので、履いていたヒールの踵がぐらついた。

「きゃっ」

ぐらりと視界が揺れて、私は後ろ向きに倒れた。

こんな公衆の面前で転ぶなんて恥ずかしい――！

ぎゅっと目をつぶって覚悟すると、背中に固い床の感触ではなく、ふわりと誰かに抱き止められた。その人の服にジュースがばしゃつとかかる。

「す……すみません！ 私つい、うっかりしていて……ひっ！」

あわてて私は身を起こし、振り向いた。そして悲鳴をあげた。

私を抱き止めてくれた人は、あのグレイ・レ・ディズレイリだったのだ。

「お怪我はありませんか」

「あっ……！ はい……。あっ、あなたこそ服を！」

私の持っていたジュースがかかったせいで、彼の騎士隊服は胸の所が濡れてしまっていた。

「ああ」

彼は、自分の服をみて、今気付いたかのように驚いた。

「いや、大丈夫ですよ。すぐに乾きます」

「そんな！ 早く着替えないと風邪をひいてしまいます！ 着替えてく

ださい！」

醜男とはいえ、自分のせいで被害を被った人を放置してはおけない。すると彼はにやっと笑った。

「じゃあ貴女もご一緒に」

ひょいっと抱き上げられる。

「な、なにをなさるのです」

「気付いていないとでもお思いですか」
どきっとした。

「貴女、右の足首を捻挫しているでしょう」
――ばれた。

実はさっき倒れた時に足首をひねってしまったのだ。
気づかれないようにしていたつもりだったのだが、ばれてしまったらしい。

「まったく、私の心配より貴女の心配をしてください。医務室に行きますよ」

「えっ、あっ、ちょっ」

私は衆人監視の中で 그레이 に抱き上げられて医務室へ運ばれた。

「……ありがとうというべきなのでしょうね」

그레이 によって運ばれた医務室で、私は羞恥に震えながら口を開いた。

私が治療を受けている間に着替えたらしい、普段の騎士隊服姿の彼は申し訳なさそうに医務室のベッドに腰掛けた私に向かって礼をした。

「無理に連れてきてしまったことは謝ります。でも、
そうでもない」と貴女は無理するでしょう？

凶星をさされて私はぐっと言葉に詰まった。

「……失礼なことを言っでごめんなさい。連れてきていただいてありがとうございます」

——醜男のくせにっ……

ひそかに唇をかみしめる。

「でもこちらこそすみません。僕みたいなのに関わったら貴女の評判が落ちるかもしれないと考えるべきでした」

「本当よ。貴方みたいな醜男と関わったなんて……あっ」

私は慌てて口を押さえた。バカバカ私、こういう時に何で本音を言っちゃったの！

おそろおそろ目だけ動かして彼を見る。

果たして彼は、にこりと笑って

「それについては重ね重ね申し訳ない」

もう一度深く一礼した。

「あ、あのは本心じゃ……」

「構いませんよ、いつも言われている事です。むしろ陰ではなくはつきり言っていたいただいてありがたいくらいです」

私は穴があつたら入りたいくらいの羞恥で身が張り裂けそうだった。「とにかく、今日は助けていただいてありがとうございます。では私はこれでお礼は後日、また改めて返させていただきます。では私はこれで彼に向かって一息に言い、立ち上がると視界がぐらりと揺れた。

「きゃ」

足を挫いてたのを忘れていた。

「またそうやって貴女は無理をする」

「……ご迷惑をおかけします」

結局、私は彼に付き添われて家に帰ったのだった。

彼女を家まで送り、執事に託してから俺は帰路についた。

——色々放っておけない娘だったな。

舞踏会での彼女の様子をみて、実際話してみて、そう感じた。

もともと彼女が婚約者（仮）ということで話しかける隙を窺っていたために助けられたのはよかったが、あの真っ直ぐさというか正直さは社交には向かないことは容易に想像がつく。

俺と医務室で向き合ったときの会話を思い出してふっと笑う。

「守らなくていいくらい芯の強さを持っているのにこんなに守ってあげたくなる人は珍しい」

今頃彼女は どうしているだろうか。俺のことを考えてくれているだろうか。

——ああ、俺も大概馬鹿だな。

少し話ただけでこんなに彼女を好きになってしまったなんて。

いつもは気にしてしまう自分の外見も気にならなくなるくらいに。

いや、もちろん彼女は気にするだろうが。

はつきりと醜男と言った彼女。

あの時は傷つくというよりも彼女にも言った通りに、はつきりと面と向かって言われたことに驚き、ありがたかった。

彼女は醜態をさらしたと思っているようだがそれは勘違いだ。

彼女が自分自身を見せてくれた。

というのはさすがに言い過ぎだろう。でもそれに近いと思って罰は当たらないのではないか。

自宅に着いた。

ドアを開けると執事が頭を下げる。

「グレイ様、どうなさいましたかその格好は」

「汚れたから着替えたただけだよ、心配いらない」

さようでございますか、と執事は体をよけて俺を通した。

「そういえばグレイ様、メーベル様はどうでいらっしゃいましたか」
俺は執事を振り替える。

「とてもいい娘だったよ、彼女はね」

「もう大丈夫よ、ありがとう」

部屋まで執事に連れてきてもらった所で私は執事を返した。

乱暴にドレスを脱ぎ捨ててベッドにぼふっと倒れこんだ。

「あーあ……やっちゃった」

目の上に手を当てて反省する。

彼はこんな私をどう思っただろう。馬鹿な女だと思ったかもしれない。これでは社交が上手い下手の問題以前に、人としての問題になってしまう。

別に醜男に何を思われても……とそこまで考えた所で私はあることに気づいて頭を抱えた。

——本人に醜男って言っちゃった……

彼はフォローしてくれたが、本人に言うなんて正気の沙汰とは思えない。

できることなら彼の記憶から私が倒れた所全てを消去してしまいたい。

——受けとめてくれた所は少し素敵だったけど……ね。

思い返して顔が熱く火照る。

ひんやりとした枕に顔を埋めながら小さく息を吐いた。

「お礼しなくちゃ……」

正直、こんな醜態をさらした後で彼に会いたくはない……が、お礼をしないわけにはいかない。

それこそ、アデライン家の名に恥じる。
その時にこそ、ちゃんと謝らなくては。

とりあえず今日は色々あって疲れた。他のことはまた明日考えよう……。

私はだんだんと眠りについた。

自室に戻った私は、ベッドに腰掛けてため息をついた。

「誰が流したのよ、もう」

貴族たちの楽しみは豪華な料理を食べること、取り巻き、または自分の土地の農民たちから金をしぼりとり、娼婦を抱くことなどの他にもう一つある。

他人のスキャンダルだ。

どちらも大貴族で名家のアデライン家とディズレイリ家のスキャンダルとあれば、他の貴族どもが黙ってはいないだろう。

——まあ、スキャンダルとはいいつつも、別に疾しいことはしていないのだけど。

名家同士の結婚の例なんて今までにはいて捨ててもお釣りがくるくらいある。

政略結婚なんてザラだし、むしろ今だに結婚適齢期になっても妃が決まらない王子の妃候補に挙げられないだけまだマシであるといえる。

祝福されこそすれ、変な噂の種にされるいわれはない！と言いたいところだが、残念ながら今回は相手が悪かった。

なにしろ、相手が醜男で有名のグレイ・レ・ディズレイリである。社交界にも美人で通るアデライン家の令嬢、メーベル——貴族たちもこぞって息子の妻にと望む彼女だが、なぜ他の誰でもなくグレイを選んだのか。

実は裏で何かあるのか？とにらんで妄動する輩も出てくるだろう。

そうなるともう收拾は不可能である。あとはなるようになるしかない。

……とそこまで分析した所で私は酷い頭痛に襲われた。
今更ながら、あの時倒れてしまった自分の迂闊さが悔やまれる。

「あと3日くらいしたら彼の所にお礼に行かなくちゃ」
決意した瞬間、部屋にノックの音が鳴り響いて私はびくつとした。
「メーベル様、グレイ・レ・ディズレイリ様よりお見舞いの花が送られてまいりました。どうなさいますか」

礼儀正しい執事の声に、私は慌てて了承したのだった。

執事から花を受け取った途端、ふわっと甘い香りが鼻孔をくすぐる。
飾りやすいようにという配慮だろう、花束ではなく鉢植えで送られてきた花をサイドボードの上におく。

「行動が早いんだから」

お礼しようとする所にまた見舞いをもらっては本末転倒である。
それでなくても十分に借りがあるのだ。

昨日のことで彼が顔に合わずにいい人だということが判明したが、
それでも醜男は醜男である。

何を考えているかなんて分からないし、そもそも私は基本的に醜男は嫌いなのだ。

こんな衝撃的な出会いをしなければ一生関わることのない人物だったと断言できる。

「もう、なんでこんなことになっちゃったのよ……」

お母様か。お父様か。

と考えるも無駄なことは分かっている。

もともとの原因は自分なのだから。

「こんなことなら真面目にイケメン探しておくんだったなあ」

足をばたばたさせてみる。

何も変わらないことは分かっている。

噂が広まってしまった今、私を相手にしてくれる男がいるかどうかはわからないが、恩を感じているとはいえ醜男とは結婚したくない。まだ婚約者（仮）の仮の部分に賭けるとしよう。

そうと決まれば、懸案を残しておくのは性分ではない。

私はベルを鳴らして執事と呼んだ。

「メーベル様、お呼びですか」

「グレイ様にお礼したいの。何か用意して欲しいのだけど」

「かしこまりました」

これを渡したら彼とはもう関わることはないだろう。

3日後。

私は直接ディズレイリ家に向かった。

執事が自分が行くと申し出たのだが、あれだけ迷惑をかけた手前、自分ではない人にお礼を持っていかせることに抵抗を感じて断った。自分の目の前に広がる家――いや、屋敷はとても上品だが豪華に造られていて、庭の手入れもよくできているらしく冬バラが遠目からでも鮮やかに咲き誇っていた。

ドアに近づき、真鍮製のドアノブで2回ノックした。

「どなたでしょうか」

ドアが開き、執事が顔をのぞかせる。私は丁寧に一礼して名乗った。「メーベル・レ・アラインと申します。先日は 그레이 様に大変お世話になりましたのでお礼を差し上げに参りました」

「それはどうも、ご丁寧」

執事も洗練されている礼をし、私は屋敷の中に通された。

足音を吸い込むほど毛足の長い絨毯の上を歩きながら私は屋敷の中を見回した。

「あの、」

前を歩く執事に呼びかける。

「何でございますか、メーベル様」

「この屋敷の執事はあなただけなのかしら？」

「ええ、そうでございます」

屋敷はきれいに磨き上げられているのに、人の影がない。

もしかと思って尋ねてみたのだが、どうやら正解だったらしい。

「 그레이 様があまり人が多くいるのを望まなかったために私一人で切り盛りさせていただいております」

私は素直に感心した。

「素晴らしいですわ。あなたがいるからこそ、 그레이様も安心して他の人を使わずにいられるのだと思います」

「メーベル様のような高貴なお方にそのようなお声をかけていただけるとは光栄でございます」

執事は立ち止まって目の前の部屋のドアを開けた。

どうやら応接室らしい。

「どうぞ、腰掛けてお待ちください」

執事は一言残して部屋から退出した。

「お待たせいたしました」

私が待っていると執事の声と共にドアが開いた。

「わざわざ貴女自らおいでくださるとは思いませんでした」

家の中だからなのか、彼は通常の騎士隊服を身にまとって現れた。

「いいえ、あんなに迷惑をかけて自分でお礼に来ないというのは理に反するでしょう？」

私は立ち上がって一礼し、彼が座ったのを見て座った。

執事がカートを引いてきてなめらかな手つきで紅茶をいれた。

その様子を見て私は慌てた。

「あ、あの、そんなに長居するつもりではないのですけれど……」

「まあ、せっかく来たのだし、ゆっくりしていただくさい」

彼が勧める。

「でも、こんなおもてなしを受けてはせっかくお礼を差し上げに参ったのに意味がなくなってしまうです」

固辞すると、では、と彼は言った。

「貴女にここでゆっくりしていたたくことが私へのお礼……ということでもいけませんか？」

——うう、上手い。

そういうことならと、渋々承知した。

彼はにこりと微笑んだ。

その時、

「グレイ様、王宮からの使者がおみえです」

執事がドアの近くから呼びかけた。途端に彼は表情を消して立ち上がる。

「しばし席を外します。貴女はくつろいでいてください」
短く言い置くと彼は部屋を出ていった。

所在なさげにティーカップを手取る私に、執事が話しかけた。

「差し出がましいことを申すようですが、メーベル様、グレイ様があんなにお話するのは珍しいことなのでございますよ」

「えっ、嘘!？」

思わず素が出てしまった。

執事は何事もなかったかのように話を続けた。

「嘘ではございません。いつもはもっとぶっきらぼうでございます」

「それは光栄の至りですわ」

うわの空で答えて、私はとりあえず思考を落ち着かせるために紅茶を飲もうとカップを傾けた。

それを見て執事が慌てて私に向かって手を伸ばした。

「ばしゃっ」

「!？」

水音がしたが、私は何が起こったか分からずに目をぱちくりさせた。

「不注意にも程がある」

上から降ってきた声に顔を上げるといつのまにか戻ってきていた彼がいた。

右手に持っていた私のティーカップをカートに戻し、……私のティーカップ!？」

私の右手を見ると、持っていたはずのティーカップがなく、私は混乱した。

「何で……どうして？」

「ぼうっとしながらカップを傾けるな」

彼はカートの上のふきんで左手をふきながら短く答えた。

どうやら私がカップを口から放して傾け、彼が紅茶を左手で受けとめて右手でカップをとったということらしい。

遅ればせながら事態を理解した私は、またしても舞踏会の時のようにかっとな顔が熱くなるのを感じた。

「え……あつ、あ！すみません、熱かったですよね！？」

私はあわあわと辺りを意味もなく見回した。

「大丈夫だ」

相変わらず彼の言葉はそっけない。もしかして怒っているのだろうか。

恐る恐る顔色を窺う。

もしこれでアデライン家の印象が悪くなったらどうしよう。

「 그레이様、 메ー벨様が恐がっていらっしやいます。女性の前ではにこやかに振る舞うようにしていたのではありませんでしたか」
——えっ？

驚きに目を見開く私に執事は微笑んだ。

「 메ー벨様、 그레이様は怒ってなどいらっしやいませんのでご心配ありません。こちらが本当の 그레이様の性格でございます」

「ヨシユア」

彼に名前を呼ばれた執事は一步退いて礼をした。

「……あのっ」

執事の言葉を信じて、私は彼に呼びかけた。

「何だ」

短い返事に戦々恐々としながらも尋ねる。

「あの、本当に怒っていないのですか？」

「……ああ」

彼は開き直ったように頷いた。

——よかった。

小さくほうつと息を吐く。

その様子を見た彼は訝しげな顔をした。

「貴女こそ怒っていないのか」

「？」

私は首を傾げた。何が？

相変わらず紋切り型の口調で彼は話す。

もうばれたから構わないと思っているのだろう。

「その……貴女に対する態度を」

私はもう一度首を傾げた。

ますます分からない。

ありがたがるなら分かるが、怒る理由は特に見当たらない。

理解出来ない様子の私に耐えかねて彼は答えを口にした。

「他人の前では性格を偽っていることだ」

「……ああ！」

なんだ、そんなことか。

「怒らないですよ。だって私だってしてますから」

腑に落ちた私が彼に言うのと、彼はほんの少しだけ表情をほころばせた。

「貴女はそういう取り繕いは嫌いなように感じた」

「嫌いですよ。すぐく嫌いです。でもそうしないと生きていけませんからね」

私の言葉に、今度は声を押し殺して笑い始めた。

「何がおかしいのですか」

「俺の前では取り繕いきれていないようだが」

言った後、ふと真顔になって彼は尋ねる。

「もしかして、他の人の前でもこうなのか」

「えっと、たまに出ちゃう時はあります……なんとかごまかしますけれど」

それを聞いて、彼は安堵したように見えた。
気のせいだろうか？

「それはさぞや父上が心配なさっていただろうな」

「ええ……まあ」

この質問には苦笑いで応じるしかない。

心配した結果がこれなのだから。

「……って、いけません！火傷していませんか!？」

はっと思い出した。

すっかり話してしまったが、私がこぼしかけた紅茶を素手で受けとめていたのだからそれなりの火傷を負っているのではないか。

嘔み付くような勢いで尋ねた私に押されるように彼は軽く身を引いた。

「大丈夫だと言ったはずだ」

「や、ダメです！ちゃんと冷やさないと……剣が」

——剣が持てなくなっちゃう。

必死の呟きに彼は驚愕の表情を浮かべた。

「……貴女は本当に真っ直ぐだ」

はあ、と彼は少し嘆息した。

「は、はい!？」

「それに、少し大袈裟でもあるな」

「な!？」

反論しようとした私の機先を制するように彼は左手を出して見せた。
紅茶を受けとめた手を。

「ヨシユアが人に出すのに熱湯を出すはずがない。せいぜいぬるま湯程度だ。火傷をする熱さではないだろう」

彼の言葉通り、彼の左手は水ぶくれができていなくてもなく、赤くも

なかった。

何事もなかったかのような手を見せられて、私は納得するしかない。

「……よかった、なんともなくて」

やっと安堵のため息をついた私の目の前にティーカップが出された。顔を上げるとにこりと微笑むヨシユアさんがいた。

「さっきはお飲みになれなかったでしょう。どうぞ」

「ありがとうございます」

受け取って一口飲む。

——美味しい。

「美味しいです」

素直に感想が口からこぼれた。

自然と顔がほころぶ。

それを見てヨシユアさんも目を細くして笑った。

ああ、私の家にもこんな執事がいたらな……あれ、執事？

私は何か忘れているような気がして眉根をよせた。

「どうかなさいましたか？」

急に難しい顔をした私に、ヨシユアさんが声をかける。

「ちょっと、何か忘れているような気がして……」

「ここに来た目的じゃないか」

「……あーっ！」

慌てて私は足元の紙袋を持ち上げた。

「この前の舞踏会でのお礼です。どうぞ受け取ってください」
彼に差し出す。

「気を遣わなくてもいいんだが」

彼は呆れた顔をして紙袋を受け取った。

「とりあえず中は日持ちがするお菓子なので急がなくても大丈夫です」

「重ね重ねすまない」

律儀に頭を下げる彼。

「いえいえ、こんなにお世話になったんだから当然です。では、このくらいで失礼します」

最後は貴族の令嬢らしく優雅にと心がけながら礼をした。

「紅茶、とっても美味しかったです。ごちそうさまでした」

踵をかえしてドアへ向かうと、彼の声が追いかけてきた。

「また飲みに来ていいからな」

「――はい！」

もう再びこないと思いながらも振り返って精一杯の笑顔を残した。

馬車に乗ってデイズレイリ家を振り返ると、見送りにきたヨシユアさんがお辞儀をしているのが見えて、少し胸の奥がちくりとした。

でも、これで彼への借りは全て返した。

そう思うとほっとする。

もうこれで彼と関わることはない。お母様とお父様には悪いが、元から興味のない人と結婚はつらいだろうし、それよりなにより、醜男は嫌いだ。

たとえ何度も窮地を救ってくれたとはいえ、それで結婚したくなる訳でもない。

それとこれとは別物だ。

お互いに素を少し見せてしまったものの、さほど影響はないだろう。

「さて、と。新しい婚約者、みつけなくちゃ」

私は小さくため息をつく、馬車の椅子に深く座った。

機会は早くに訪れた。

お父様が日頃の忠誠の礼にと王様直々に勲章をいただくはずだったのだが、急遽体調を崩して寝込んでしまったために私が代わりに王宮へと出向くことになったのだ。

モスグリーンのドレスを身にまとい王宮に参上した私を王様の元へ案内したのは、王直属の近衛兵だった。

目鼻立ちの整った美形で、暗すぎも明るすぎもない絶妙な茶色の髪。一見華奢に見える体躯はしなやかで無駄な筋肉がないことを窺わせる。

そして丁寧な身のこなし。

王直属の近衛兵として十分に洗練されている。

——まさしく、好みのタイプ。

顔がよくて優しそうで……とは世の女性が自分の伴侶にと思い描く一般的な理想だが、あくまでも理想であって現実ではない。

実際にはそんな都合のよい男性はいない。

……というはずなのだが。

何事にも例外はつきもののようだった。

そして、その例外は今私の隣にいる。

謁見の間までの長い道のりをさりげなくエスコートして歩みを進めている彼。

端正な横顔に見とれていると、その視線に気づいたかのようにふと彼がこちらを向いた。

「私の顔に何かついておりますか？」

少し笑みを含んだ声で問いかけられて、私は顔を赤らめた。

「いえ、つい見とれてしまって」
正直に答えると彼はくすりと笑った。

「美人と名高いアデライン嬢にそんなことを言っていただけるとは
光栄です」

「お世辞が上手ですのね」
そこで私はたと気づいた。

「私の名前をどうしてご存知なのですか」
まさかこの前の舞踏会のことで……。

密かに危惧していた私を、彼は意外そうに見た。

「だから、さっきも申し上げた通り、アデライン嬢は美人として王
宮中では名高くていらっしやいますので。貴女を狙っている男は星
の数程もいるのですよ」

「そ、そうでしたの」

突然、予想外の話を持ち出されて私は動揺した。

「貴女とお近づきになりたいと思っている男はたくさんいますが、
なかなか舞踏会にもいらっしやいませんし。このようなところで貴
女とお近づきになれるとは、私も実際、予想していませんでしたか
ら」

近衛兵になってよかったと思います。

まぶしいほどの笑顔向けられて、胸の鼓動が高鳴る。

「こ、こちらこそ。貴方のような方とお話できるのはこの上ない
幸福ですわ」

控えめに尋ねてみる。

「貴方の名前をよろしければお訊きしたいのですけど……」
謁見の間についてしまった。

「私の名前はジェラルド・レ・ヴァセリンです。ではここでお別れ
いたしましょう。またいつか」

彼はそう言い残すと身を踵を返して去って行った。

無事に王様から勲章をいただいて謁見の間を出て気づく。
外への出方が分からない。
行きはジェラルド様が連れてきてくださったが、帰りはどうしよう。
王宮は広すぎて迷ってしまっただろう。
とりあえず私は歩きだした。

「困ったわ、ここがどこかも分からない」

10分後、見たことのない廊下で私は一人呟いた。
ため息をついて辺りを見回すと、遠くから金属同士のぶつかる音が聞こえてきた。

ここで騎士たちが練習しているのだろうか。

これ以上迷うのも今と変わらないと判断した私は、その音の方向へ向かった。

音がしていたのは、中庭だった。ひよい、と覗くと騎士たちが練習をしていた。

日の光に反射して剣がきらきらときらめく。

私は騎士たちの剣技をじっと眺めた。

どの人もみな、一目見ただけですごいと分かるほどの腕だったが、その中でも際立っていたのが中心の二人だった。

「グレイ様にジェラルド様……？」

二人は突き、かわし、また打ち合う。その度に剣が輝いて二人を照らしていた。

キンッ

澄んだ音が響き、剣が宙を飛んだ。

「……参りました」

両手を軽く上げて丸腰になったジェラルド様に、グレイ様が剣を突

き付けている。

「今日の訓練は終了だ」

グレイ様が宣言し、騎士たちは張り詰めさせていた緊張の糸をゆるませた。

その様子を一人中庭の入り口で眺めていた私に、目ざとく気づいたのはジェラルド様だった。

私の所に来たジェラルド様は、恥ずかしそうに頬をかいた。

「格好悪いところを見られてしまいましたね。お恥ずかしいかぎりです」

「でもすばらしかったですわ」

「ありがとうございます。いつも、あいつとは五分五分なんですよ」
あいつとはグレイ様のことだろう。

そう言って笑う口調に苦さは感じられない。

きつといいライバルなんだろうなと思う。

「ジェラルド、さっさと片付けろ……よ？」

ジェラルド様を呼びに来たらしく、近づいてきたグレイ様が私に気づいて歩みを止めた。

「これはこれは……どうなさいましたか、アデライン嬢」

メーベル様ではなく、アデライン嬢と呼ばれたことに私は気づいた。
なぜか、胸の奥が疼く。

「あの、王様に謁見しに来たのですけど、帰り道が分からなくて迷っていたらここに着いてしまいました」

「あつ、失念していました。帰りも案内するべきでしたね」

ジェラルド様がしまったというように口を押さえた。

「いつも抜け目がないお前にしては珍しいな」

グレイ様がからかう。

「きつと今日はアデライン嬢の美しさに頭がぼうつとしていたんですね」

「え、えっ！？私ですか！？」

二人の会話は面白いなあと油断していた所に突然話を振られて驚いた。

「まあ、アデライン嬢の美しさのせいだけにしてはダメですよ。片付けをしてから貴女を送っていきますよ。少々お待ちを」

ジェラルド様は言い残して片付けに向かった。

後に残されたのは私とグレイ様。

もう関わりを持たないって決めたのに……
気まずい空気が流れる。

「ディズレイリ様、訓練も終わりましたし昼時ですし、飯食べにいきませんか……って、そこにいらっしゃるのはアデライン様……！？」

グレイ様に昼食を誘いに来た騎士たちが私の姿を見てざわめいた。

「わぁ……おれ、アデライン様に会えてすごく幸せ……」

「本物のアデライン様だ！」

周りを取り囲まれて、私はあたふたした。

「あう……ええ……と、みなさん、さっきはすばらかったですわ」とりあえず思った事を口に出してみる。

そしておずおずと微笑みかけると、周りの騎士たちはそろって顔を赤らめた。

——わ、私、変なこと言っちゃった！？

「ご、ごめんなさい、なんか私変なこと言っちゃいましたか？」

「そんなことはありません！光栄です！」

「というか、アデライン様はもっとつんとした人かと思ってましたが全然違いますね！」

言葉の勢いに押されて少しよろけると、後ろにいた人が支えてくれた。

「ありがとうございます」

支えてくれたのはいつのまにか後ろにいたグレイ様。

また助けてもらってしまった。

申し訳なさに顔が赤くなる。

「こらおまえら、アデライン嬢が困ってるぞ。少し落ち着け」

「はい」

グレイ様の言葉に、渋々ながらも従う騎士たち。

まるで教師と生徒たちみたいだな、と場違いなことを考えて私は少しおかしくなった。

「みなさん、仲がよろしいんですね」

くすりと笑う。

「ね、グレイ様も楽しそうですもの」

後ろにいたグレイ様にも声をかけると、騎士たちがざわめいた。

「ちょっとデイズレイリ様！アデライン様とお知り合いなんですか！？」

「グレイ様なんて呼ばれて！親しい関係そうですね！？」

「抜け駆けは許しませんよ！」

わいわい騒がれてグレイ様は少しうろたえた。

「あ、いや、これは……」

「おれも許さないかな？」

「ジェラルド！」

片付けを終えたらしいジェラルド様が爽やかに会話に入り込んできた。

「グレイ、なんでお前アデライン様と知り合いだって言ってくれなかったんだ？」

抜け駆けしようなんて、そうはさせないからな？

ジェラルド様にも言われて口をぱくぱくさせるグレイ様。

「あ、あの、グレイ様には前に助けていただいて……もごっ」

「わっ、余計なこと言わなくていい！」

慌てたグレイ様に口を手でふさがれる。

「何ですか助けていただいてって!」

「昼食は後回しです、詳しく話を聞かせていただきますよ?」

さらに詰めよる騎士たちに目を白黒させるグレイ様。

グレイ様に口をふさがれたままの私も状況の変化についていけない。

「という訳でグレイ、おれはアデライン様を城門まで送り届けてくるから覚悟しているよ」

さ、いきましよう。

と私の口をふさいでいたグレイ様の手を外したジェラルド様が、私を少し強引にエスコートして騒がしい現場から離れた。

「もうここまで来れば大丈夫ですね」

「あっ、はい」

中庭から遠く離れた廊下を歩きながらジェラルド様は言った。

「……ふっ……くっ……」

その言葉がきっかけとなったようにジェラルド様は声を押し殺して笑い始めた。

「どうかなさいましたか？」

「ああ、すみません。さっきの 그레이 が面白くて」

私はなおも笑い続けるジェラルド様に苦笑いするしかない。

ひとしきり笑ったあと、ジェラルド様は不意に真顔になって私に顔を向けた。

「で、アデライン様は 그레이 と結局どういう関係でいらっしゃるのですか？」

——わあどうしよう。本当の事を言ってしまったていいものか。

少しためらった私に、ジェラルド様は少し人の悪い笑みを見せた。

「貴女は正直で嘘がつけない人だと見ました。どうせ 그레이 も吐かせられるのですし、教えてくださいませんか」

私はその言葉に観念して口を開いた。教えて欲しいと頼まれて断ることに罪悪感を抱いていたこともまた、理由の一つだが。

「私が先日舞踏会に出た時に、誤ってドレスのすそを踏んで倒れてしまっ、それを助けていただいたんです。その後、私の足が捻挫していたので医務室に連れて行ってくださいました」

それだけですわ。

話し終わると、ジェラルド様は驚いたらしく、目を見開いた。

そのまま数秒ジェラルド様は固まっていた。

「？」

目で問いかけると、彼はやっとまばたきした。

「いやー……」

手をゆっくりと上げ、髪の毛をくしゃっとかき回した。

「本当に驚いた。あのグレイがね……」

「？」

私の頭に疑問符が浮いているのが分かったのか、ジェラルド様は笑って説明してくれた。

「あいつは滅多に舞踏会には出ないんです。それにも驚きましたが、あの朴念人に女性を助けるということができたなんて……」

奇跡が起こったとは思えませんよ。

「ええっ!？」

私としては、今された話の方が驚きである。

グレイ様も舞踏会にあんまり出ないんだ……。

まああの顔では出たくないのも当然である。

そして、あまりにも自然な動きだったから女性を助けることには手慣れているのかと思っていた。

「私もその舞踏会に参加したかったですよ。滅多にいらっしやらないアデライン様が参加していた上にグレイの珍しい所も見られたのだから」

あれ？私はその言葉に疑問を抱いた。

「ジェラルド様は名前を伺ってみますとヴァセリン家のご子息ではありませんか。なぜ参加なされなかったのですか？」

私の疑問にジェラルド様はああ、と頷いた。

「私は近衛騎士隊に所属しているので、舞踏会には参加できないんです。近衛騎士隊隊長以外は。いつもなら出たがらないグレイの代わりに私が出ているのですが、先日の舞踏会はグレイが出ると言ったので私は出られなかったんです」

そんな裏があつたのか。
私としてはただひたすら納得するだけである。

「まったく酷い話です。グレイも、アデライン様が来ると分かつていたようなタイミングのよさじゃないですか」

「……」

それは、知ってて来たのだろう。

婚約者ということになっているのだから、いくら舞踏会に参加しない私だとて来るだろうくらいの予想は簡単に立てられるに違いない。しかし、そんなことを言ってはせっかくジェラルドと出会えたのが無駄になってしまう。

ぶつぶつと呟きつつふと前を向くと、思いがけないほど近くにジェラルド様の顔があつたため、驚いてドレスの裾を踏みつけた。

「ひゃうっ!？」

悲鳴を上げる。

この前助けてくれたグレイ様はいない。

ドレスの裾で転ぶのは今回で2度目だ。

まったく恥ずかしい。

私は目をぎゅっとつぶった。

「考え事しながら歩くのは危ないですよ、アデライン様」

「!!」

そうっと目を開けると、目の前にジェラルド様の顔があつた。

私は倒れていない。

どうやらジェラルド様が助けてくれたようだった。

……前から抱きとめて。

かっ頬が熱くなる。

「お怪我はありませんか」

「はい……」

今回は何も怪我していなかった。

「あの……もう大丈夫ですから、えと……」

「ああ、すみません」

あっさり腕を解かれて私はほっとしたのと同時に、軽い落胆を感じていた。

「はあ……」

「どうかなさいましたか」

気づかれないようにこっそりとため息をついたつもりだったのに、ジェラルド様は聞いていたらしい。

「いえ……なんでもありませんわ」

内心の葛藤を悟られまいと短く答えると、ジェラルド様は私に、グレイ様との経緯を訊いた時と同じ人の悪い笑いを試みせた。

「グレイの時と同じですか？」

「な、何をおっしゃいます」

うろたえる私を面白そうに眺めるジェラルド様。

そして彼は続けて爆弾を投下した。

「アデライン様は、容姿は美しいですが、性格は可愛らしくていらつしゃいますね」

「え、えっ!？」

あ、もう到着しましたよ。

しれっとジェラルド様は言って、立ち止まった。

気付けばそこはすでに馬車の前。

「名残惜しいですが、グレイを問い詰めなくてはなりませんし。では、またお会いできることを楽しみにしています」

「あ……はい。こちらこそ」

ようやくこれだけ喉から声を絞りだす。

ジェラルド様は私を馬車に乗せると一礼した。

それに合わせて馬車も動き出す。

ガタゴトと揺れる馬車の中、私はジェラルド様のことを考えた。

——これは運命なのかしら。ジェラルド様と出会うことは必然だったのかしら。

そうだったら素敵だな。

馬車が曲がり角を曲がる瞬間、城を振り返るとジェラルド様が立っているのが見えた。

アデライン様の馬車を見送って、俺は城へと振り返り、歩きだした。中庭に到着すると、さっきよりも大きい人垣ができていた。大方、着替えに行っていていなかった奴らも入ったのだろう。近づくとも声が聞こえた。

「グレイ様、アデライン様とどうやって知り合ったんですか？」

「……舞踏会で彼女を助けただけだ」

「本当にですか!？」

「嘘ついてどうする」

「そりゃそうですけどね、気になるじゃないですか!!」
俺も輪の中に入った。

「本当はそれだけじゃないだろう、グレイ」

俺のかけた声にグレイは振り返って目をむいた。

「何言ってるんだ、お前」

「俺、アデライン様に聞いちゃったんだよな」

「は!?!何をだ」

目にみえて動揺の色を現したグレイ。

正直な奴だなあとつくづく思う。

でも言葉は止めない。

「お前がアデライン様を抱きしめちゃったこと」

「はあ!?!「えー!!」」

グレイが声を上げるのと周りの騎士たちの悲鳴が重なった。

「そりゃないですよ 그레이様！」

叫んで詰めよる騎士たちを手で制しながら 그레이が弁解する。

「ちがっ……あれは抱きしめたとかそういうのではなくて……」

「言い訳ですか!？」

騎士の1人が 그레이に噛みつく。

그레이がぐっと言葉に詰まる。

「どうか ジェラルドは何を聞いたんだ」

騎士たちには劣勢とみたのか 그레이は俺に話を振ってきた。

「いや、特に聞いてないよ?」

「嘘をつくな」

「ついてないって」

本当か?と疑わしそうな 그레이。そんな 그레이に向かって、これは事故だったんだけど、と前置きしてから話した。

「アデライン様が倒れたのを助けたらやけに動揺してたからさ」

正直そうだもんね、アデライン様。

俺の言葉に 그레이は強く同意した。

「ああ」

見てられないくらいにな。

俺は 그레이の口がそう小さく動くのを見た。

その頬がわずかに朱に染まっていることも。

「……ジェラルド様もアライン様と勝手に親睦を！許しません！」
「おいおい、事故だって言っただろ？」

今度は俺に追及の矛先が向いた。

「事故だろうとなんだだろうと、ダメなものはダメです！」

「ダメって……お前が決めることじゃないだろ」

「確かに決めることではないですが、むぎむぎと美人が手折られるのも嫌なんです」

なんとも正直な奴だ、と苦笑いしながらそろそろ潮時だろうとグレイに目配せした。

あいつも心得ているらしく、かすかに頷くと声を張り上げた

「よし、今日の昼飯は奢ってやる」

その声を聞いて反応は二通り。

素直に喜ぶ奴と、渋る奴。

「そんなこと言って、はぐらかそうとしないでください！」

「別にはぐらかそうなんて考えてないさ。奢るって言っても、ただの定食屋じゃないからな？なんと、あのドン・シャレオだからな？」

俺がダメ押しのように超人気店の名前を出すと、渋っていたやつもあっさりと追及の手を緩めた。

「仕方ありませんね、それで手を打ちます」

少しばかり高く付いたが、こんな時こそ貴族の名家の力を使う。

グレイもいることだしなあ、と考えていると、遠くから名を呼ばれた。

「ジェラルド様ー、早く早く！」

現金なことに、騎士たちはもう店へ向かって歩きだしていた。

店で口止め料がいくらぐらい必要なのだろうと考えて途中で諦める。

——いいさ、いくらでも奢ってやるよ。
アデライン様に会えたから。

「今行く！」

俺は答えて歩きだした。

ドン・シャレオで満足そうに料理を食う騎士たちから離れたテーブルに、俺とジェラルドは座った。

「結構奢らされたな」

俺がため息まじりに呟くと向かいのジェラルドはくくつと声を殺して笑った。

「それはお互い様でしょ」

まあそうだな、と同意して俺は手に持っていた茶のカップを口元に運んだ。

「でも、元々の原因はアデライン様だよ」

俺はカップを傾ける手を一旦止め、代わりに息を吐きだした。

「正直だから」

短く答えてもう一度カップを傾けると、カップの向こう側のいたずらな光が灯っている目と目が合った。

「ずいぶん詳しいみたいだね、アデライン様のこと」

「別に」

素っ気ない言葉を向けて、茶を口に含んだ。

「ふうん。で、 그레이はアデライン様のことが好きなの？」

「!! げほっげほっ」

さりげなくいきなり核心を突いた問いを向けられて俺はむせ返った。

「あーあ……もっと落ち着いて飲みなよ、 그레이」

ほら布巾、と手渡された布で口元を拭う。

周りのテーブルの騎士たちが何事かとこちらを眺めている。

なんでもないなんでもないと手を振って、俺はジェラルドに向き直った。

「いきなり何を言いだすんだ、お前は！」

ジェラルドに噛み付くとジェラルドは人の食えない顔をして笑った。

「なんだよ、動揺してるのか？」

からかい口調の言葉が飛んでくる。

「うるさい」

「なんだよ、言えよ」

「何でお前に言わなくちゃいけないんだ」

「いいじゃん。俺が聞きたいんだよ」

しつこく食い下がってくるジェラルド。

「お前の事なんか知るか」

突っぱねると、ジェラルドは眉をはねあげた。

「俺、アデライン様の事が好きだよ」

「……は？」

とっさには俺はジェラルドの言った言葉が理解できず、まぬけな声をあげた。

「だ・か・ら、俺はアデライン様の事が好きなんだ」

はつきりと言い切った後、ジェラルドは目を細めた。

「別にお前がアデライン様の事を好きでも好きじゃなくてもどっちでもいいけど、俺の気持ちを前知っておいてほしかったんだ」

訊けるものなら前知がアデライン様の事をどう思ってるか聞きたかったけどな。

俺は絶句した。まさかジェラルドもメーベル様を好きだなんて。

「……俺も」

「ん？」

「俺も、アデライン様の事が好きだ」

ジェラルドが言ったのだから俺も言わなきゃ嘘だ。

俺の目を見て、ジェラルドは笑った。

「じゃあ俺たちはライバルって訳だ」

「ああ、そうだな」

「剣だけじゃなくて恋愛もってことだな」

「ああ」

「俺、負ける気ないから」

ジェラルドの言葉をきいて、俺も望むところだと頷いた。

——俺だって負ける気はないさ、もちろん。

決意を固めている男たちがいる中、王宮では王が大臣を集めて話をしていた。

「もう息子も結婚してもよい年じゃ。そこでそろそろ妃を探そうと思う」

大臣たちが騒めく。

1人の大臣が挙手した。

「妃に関しては、既に候補がいらっしゃるのでございますか。もしいらっしゃらないのであれば、私の娘を是非とも妃に……」

それを聞いた他の大臣たちも我こそはと挙手する。

「いや、貴殿の娘より我が娘を」

「私の娘だろう」

「いや、私の……」

次々と展開される会話の中、王が口を開いた。

「もちろん、候補は決まっておる」

話をしていた声がぴたと止んだ。

恐る恐るといった様子で大臣の1人が尋ねる。

「そ、それはどなた様でいらっしゃいますか」

「それはな、メーベル・レ・アデライン嬢じゃ」

それだけ言って王が口を閉じたので、大臣たちはまさかといった表情で顔を見合わせた。

「まさか……候補はアデライン嬢1人……？」

王が頷くを見て、大臣たちは慌てた。

無理もない。候補が1人ということは、もう妃は99%メーベル・レ・アデライン嬢に決定ということだからだ。

何か事故でも起きて、アデライン嬢がいなくならない限り。

頭で忙しく計算をめぐらせながら大臣たちが理由を尋ねた。

「今日、アデライン伯の代わりとしてメーベル嬢が来てな、聡明そうだし、息子の妃としてふさわしい容姿を持っているからの」

理由を聞いて、大半の大臣は納得せざるを得なかった。

毎日舞踏会三昧だった大臣たちの娘とは違い、メーベル嬢は名門大学を首席で卒業した才媛で、おまけに妬んだり羨んだりするレベルを通り越すほどの美人なのだ。

しかし、舞踏会にまったくと言っていいほど出席しないため、地位などには興味が無いと思われており、大臣たちのライバル視の視線は少なかった。

……が、王自らが指名したとあってはさすがのメーベル嬢とて大臣たちや大臣たちの娘の敵視からは逃れられないだろう。

「で、殿下……それでは、皇太子殿下のご意志は？」

悪あがきのような大臣の言葉に、しかし王はああ、と頷いた。

「そうじゃった。息子の意志を訊いてみないことには決まらぬな。余ひとりが良くても息子が嫌なら、また考え直さねばなるまい」

場の空気が緩む。

とりあえず猶予は延ばされた。

その間に打つべき策を、大臣たちはめまぐるしく考えながら解散したのだった。

王が大臣たちを集めて話をした数日後、騎士隊にも噂は回ってきた。

「おい、聞いたか 그레이」

「ん、まあな」

「アデライン様が王子の花嫁……か」

はあ、とジェラルドはため息をついた。

「だが、まだそうと決まった訳ではない」

「だけどさ……」

俺の言葉にジェラルドはうらめしそうに反論する。

「あの王子サマが、アデライン様との婚姻を拒否すると思う？」

「……思わない」

王子は、優秀な王の息子としては、あまりにも平凡な男だった。やれと言われたこと以外のことはやらない、考えもつかないという、王たるに相応しいとは到底言えない王子である。

そんな王子が、よほどの醜女ならともかく、アデライン様との婚姻を断る訳がない。

そして、王もそれをわかっていて才媛であるアデライン様を選んだのだろう。装飾品など着飾ることにしか興味がない他の娘たちと婚姻を結ばせるより、王家が安泰だからだ。

「まったく、アデライン様もやっかいなことに巻き込まれたもんだね？」

「ああ、まったくだな」

あの、まったく地位や権力や名声といったことに何ら関心のなさそうな娘は、こんな権力争いに巻き込まれるのを望まないだろう。でも、この世界で生きていくためには個人の気持ちは諦めなくてはならないのだ。

「で？ 諦めるの、 그레이は」

「……そうしかないだろう。かなり不本意だが」

かなり、の部分を強く言ってしまったのは仕方のないことだと思う。

「へえ？諦めちゃうの？まあライバルが減るけど」

ジェラルドは鼻でふふんと笑った。

「あんないい娘、そうそういいいよ？王子サマなんかの花嫁にはもったいないよね」

俺は目だけ動かしてジェラルドを見た。

「そんなことはわかりきっているが……珍しいな、ジェラルドが1人の女に執着するなんて」

顔がいいだけに、1人の女への執着がないという悪癖を持つ友に言うとき、当人は皮肉っぽく笑った。

「まあね。だって……あんな都合のいいカモは初めてだから」

「……はあ!？」

俺は目をむいた。

ジェラルドは肩を軽くすくめてみせた。

「だってそうだろう？家は名家で実力もある。本人だって文句のつけどころがない娘じゃないか。それに正直で……付け込みやすいからね」

「ふざけるな!」

俺は我を忘れてジェラルドに掴みかかった。

胸ぐらを掴む。

ジェラルドは悪びれた風もなく、俺の目を見返した。

「俺だって最初はいいい娘だなんて思ったし、今も思うけど、正直言っておの娘は素直すぎて逆に面倒なんだよね。でもカモにはなってくれそうだから」

一旦ジェラルドは言葉を切り、胸ぐらを掴んでいる俺の手に手をかけた。

「お前だって言ったじゃないか。俺が1人の女に執着するなんて珍しいって」

力ずくで手を離させられる。その力でジェラルドのボタンがちぎれ

て俺の手の中に残った。

ぎゅっとその手を握り締める。

「お前がそこまで嫌な男だとは知らなかった」

「俺についてまた知識が1つ増えたわけだね」

「……出ていけ」

俺は冷たく言った。

「出ていけよ。お前みたいな最低なやつと同じ空気を吸いたくない」

「そうさせて頂くさ」

ボタン。

音を立ててドアがしまる。

俺はそのドアを見つめて、手に握り締めていたボタンを床に投げつけた。

かん、と小さい音がして、ボタンは床に転がる。

「ふざけるな……」

ドアをもう一度睨み付けてから俺は荒々しく椅子に腰掛けて机の上の書類を片付け始めた。

ボタンと乱暴にドアが閉まった後、俺はふっと口元に笑みを作った。

「まったく、素直なやつなんだからな、グレイは」

素直なグレイは俺の言ったことを全て信じているにちがいない。

まあ、信じてもらわなくては困る。なぜなら、それは全て嘘だから。

——そう、今言ったことは全て嘘だ。

でも、悪意をこめてではない。親友であるグレイのために身を引くためだ。

その証拠に、今でも胸が痛む。

友に嘘をついた罪悪感と、好きな人を諦めなくてはならない辛さ。

でも、仕方がないのだ。

グレイ、いや、アデライン様の願いのために。

いや、アデライン様は否定するだろう。イケメン好きと自認するあの人は、醜男なグレイに自分が心を奪われていることなど認めないに違いない。でも、実際は違う、

アデライン様は、グレイのことが好きなのだ。

自分がイケメン好きだとあまりにも強く信じすぎて、自分で自分の心に嘘をついているのだ。

でも、自分でも知らないうちに本音は出ている。

例えばそう、抱きとめられた時とか。

アデライン様は自覚していないだろうが、アデライン様が倒れる瞬間に彼女は小さく助けを求めた。

『グレイ様』

と。

その後、グレイの名を出してからかうとびっくりした顔をしていたから彼女は自分がグレイを呼んだことに気付いていないのだろう。その時、素直に、アデライン様をかわいいと思った。

でも、実際はグレイとアデライン様は相思相愛だと思い出して目の前が真っ暗になる。

今、ここで笑ってる人が、自分には絶対に手の届かない所にいる。

できることなら自分の隣で笑っていてほしい。でも、悲しむ顔は見たくない。

ならば。

彼と彼女を引き合わせることが彼女の幸せに繋がるのなら――

たとえ自分が苦しくても、二人の幸せを願うよ。

「ま、グレイが踏み出せるように後押ししたんだから、せいぜい頑張ってもらわないと」

小さく呟いて、俺は自分の部屋へと歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8217p/>

君をみつけたStory

2011年3月24日21時33分発行